



YAMAMORI PROJECT代表
井上 貴詞さん 須藤 修さん

今回は山形県の里山を舞台に、ツアーの企画やプロダクト開発などを行う「YAMAMORI PROJECT」代表の須藤修さんと井上貴詞さんにお話を伺いました。



山には宝がいっぱい



山形の里山は、感動がいっぱい Link・Cycle・Surviveを キーワードに山を守り続ける

雪

がうつすらと積もる寒さ厳しい12月の山形県南陽市を訪れると、YAMAMORI PROJECTの代表 須藤修さんと井上貴詞さんが温かく迎えてくれた。

YAMAMORI PROJECT

は、家具デザイナーの須藤さんと一級建築士の井上さんが、山形県の里山を舞台に山やものづくりを体験するツアー「TRAVEL」、県産材を使った製品を開発・販売する「GOODS」、県内の森林に関わる人々を紹介する「MEETING」の3つの活動を目的に2012年に立ち上げたプロジェクト。

「現在、林業家、製材業、加工業、消費者の接点は少なく、それぞれが必要としていることや実現できる可能性などを把握できていません。そのため、実際は需要がある部分も最初から諦めているので森林資源が循環せず、森林環境の悪化にもつながっています。そんな森林と人をつなぎ、循環することで山や森を生き残らせたいとスタートしたのが、このプロジェクトです」と須藤さん。

そんな須藤さんに誘われてメンバーに加わった井上さんは、「山形県35市町村ごとに積み重ねてきた歴史が異なり、

毎回新しい発見ばかり。自分自身が、日々山の奥深さに感動しています。また、ツアーには各地から参加者が集まり、人と人、人と山、人と地域がつながる瞬間に立ち会うことができることも楽しいですね」と話す。

—実際に活動してみたいかがですか？

「ツアーは地元の方から山の歴史や文化を聞き、実際に山で植生などに触れ、土地の食を味わい、県産材を使った木工ワークショップを一日で体験します。イベント前には私たち二人でその土地を訪れ、山の背景を学ぶことから始まります。ツアーの特長は、私たちが感じた面白さを参加者が追体験できること。そうして出会った林業や製材業、木工業などに携わる方をフォークラスし、ウェブ上で情報発信していくのがMEETINGです。毎回、初めての方がほとんどで、地元の方の協力なしでは私たちの活動は成り立ちません。今では、地元の方も参加者との関わりをヒントに町おこしのきっかけにするなど、町ぐるみでの大きなプロジェクトに発展することもあります」(須藤さん)



ツアーが終わるころにはみんな仲良しに



TRAVELではガイドさんと山歩き。
新しい発見がそこら中に転がっている



地元の方を講師にその土地の歴史や文化を聞く



山の恵みを食すのもツアーの醍醐味



木工ワークショップ



取材中、何度も「一方通行ではない活動を」という言葉を聞いた。これは、YAMAMORI PROJECTが単に山を紹介するだけでなく、提供される側が自ら体験し、一緒に考えることを大事にしているということ。それがよくわかる活動の一つに、ツアーの最後に組み込まれている木工ワークショップがある。ツアー開催地の木やものづくり技術を使って実施される木工体験は、その土地の文化を知り、山とふれあった参加者にとって、さらに山や森を深く知る体験となる。また、県内のものづくり技術を生かし、県産材を加工して販売するGOODSでも、商品を実生活で自由に使用し、SNSでその使い方の紹介や感想を投稿する体験モニターを募集している。こうして五感で感じることが、本当の意味で山を知る第一歩になるのだろう。



YAMAMORI
GOODS

「ツアーには県内の山に詳しい森林ガイドさんと同行していただいています。ガイドさんと一緒に山を歩くことで、魅力的な部分だけでなく、怖さも含めて自分だけでは見えなかったことが見えてくる。そうすると、参加者もある意味、プチガイドとして他の人に教えられるようになります。こうして山を知っていただき、ツアー後もその山を目的に訪れる人が増えることを期待しています」（井上さん）

「この活動を一過性で終わらせたくありません。山や森を知る学びの機会を継続し、その結果、私たちのプロジェクトが日常の楽しみの一つになってほしい。また、地元にも町の魅力を掘り起こす一つの手段として捉えていただき、地域づくりに結びつくきっかけに発展していければ嬉しいです」（井上さん）

「二人の活動だけで森全体を変えることは不可能です。ですから、私たちがすべきことは山に対する敷居を下げ、森林活動を始めるきっかけをつくること。今後は、TRAVELの振り返りやMEETINGの内容をまとめた小さな冊子をつくることで多くの方にこのプロジェクトを知っていただき、山に興味を持つきっかけにするなど、地道な活動を続けていきます」（須藤さん）

「この活動を一過性で終わらせたくありません。山や森を知る学びの機会を継続し、その結果、私たちのプロジェクトが日常の楽しみの一つになってほしい。また、地元にも町の魅力を掘り起こす一つの手段として捉えていただき、地域づくりに結びつくきっかけに発展していければ嬉しいです」（井上さん）

「山は宝箱なんです」と須藤さんと井上さんは笑う。これからも同プロジェクトは、自然が生み出したかけがえない「宝」を守り続けるため、多くの人にその価値を伝え続けていく。